

古文 読解問題 「徒然草」・「神無月」の二つと「①」

①神無月のころ、栗栖野と^(a)いふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、^(b)はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふもの^(c)なし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、⁽²⁾さすがに住む人のあればなるべし。

かくとも^(d)あられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、周りをきびしく囲ひたりしこそ、⁽³⁾少しことさめて、この木なからましかばと^(e)おぼえしか。

問一・「徒然草」に関する次の問題に答えなさい。

(1) 次の「徒然草」について説明した文の(ア)～(エ)に入る言葉を答えなさい。

「徒然草」は(ア)時代に(イ)によつて書かれた(ウ)文学である。世の中の全てのものは絶えず変化し続けているという(エ)に基づく死生観について書かれています。

(2) 「徒然草」は三大隨筆の一つとされている。他二つの作品名と作者を答えなさい。

問二・傍線部(a)～(e)の動詞、形容詞、形容動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

問三・傍線部①「神奈月」を新暦にした場合何月になるか、適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア・七月 イ・八月 ウ・九月 エ・十月 オ・十一月

問四・傍線部②「さすがに住む人あればなるべし」を現代語訳しなさい。

問五・傍線部③「少しことさめて」とあるが、その理由として最も適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア・柑子の木が実をたわわにつけている様子を見て、かつての家の豊かさを思い出し、悲しみの方が強くなつたから。

イ・柑子の木が大きく育つてもかかわらず実がなつていないので、期待が裏切られたと感じたから。

ウ・昔の家の跡を見てしみじみとした感慨に浸つて、庭にある木が人の手で厳重に囲われているのを見て、現実に引き戻されたから。

エ・庭に残る柑子の木が、昔の持ち主の好みや生活ぶりを伝えていたと感じ、過去を想像する思いが深まりすぎたから。

読解問題「徒然草 ～神無月の「ころ」～」① 解答・解説

問一 (1) ア 鎌倉(末期) イ 吉田兼好(兼好法師) ウ 隨筆 エ 無常観
(2) 枕草子(清少納言)・方丈記(鴨長明)

問二 (a) ハ行四段活用 連体形

ナリ活用 連体形

ク活用 終止形

ラ行変格活用 未然形

ヤ行下二段活用 連用形

問三 エ

問四 そうはいってもやはり住む人がいるからだろう

問五 ウ